

はじける 笑顔

vol. 15

人権の宝島：特別支援教育のとりくみについて.....1
夏季一日研修会開催.....3
天国に行ったかな、ブチ.....5
はじける笑顔：ちがうことこそ ええこっちゃ.....7



『箕面の宝物 それはひと』（南小学校発表より）
市制50周年記念「地域探検隊事業」
「わがまち“みのお”大発見」発表会にて（12月1日市民会館大ホール）



げんげの：「げんげ（紫雪草）」とは、れんげ草のことで、「げんげの」は、れんげ草が一面に生い茂る野原のことです。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を一面に咲かせます。また、れんげ草は、緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子ども一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました。

げ ん げ の の ぺ え じ

●写真募集！●子どもたちの笑顔、真剣な顔、輝く顔…などの写真をお送りください。

みのおから世界へ！ 人権文化の花束を！

はじける 笑顔

10月31日（火）南小学校で、障害のある人もない人もともに集まり、考える機会として子どもと保護者が参加して「ともにあゆむつどい」が開催されました。19年目の今年は、グラフィックデザイナーやNHK教育番組『きらっといきる』（毎週土曜日夜8：00～）のコメンテーターとしても活躍中の牧口一二さんが招かれました。

牧口さんからのメッセージ
「ちがうことこそ ええこっちゃ」

私のまわりには いろいろな人がいる
女の人 男の人
背の低い人 高い人
遊びの苦手な人 得意な人
声を出して話す人 声を出さずに話す人
松葉づえをついた人 車椅子にのった人
みんな みんな いっしょの社会で
それぞれ ちがった生き方をしている

みんな顔が同じなら
考えていることが同じなら
することも同じなら
ちっともおもしろくない

君の代わりは 誰もいない
ほくの代わりも 誰もいない
みんなちがうから
ひとりひとり 大切な人間なんだ
自分もひと 大切な人間なんだ

世の中には いろいろな人がいて
いろいろな考えがあるってことを
それぞれ 特徴をもった生き方があるってことを
一つ 一つ 知っていきながら
人間は大きくなっていくんだ
そして 深くなくていくんだ
みんな ちがうから
すばらしいんだ

【参加者の感想】

◆気持ちが楽になりました。ユーモアがあるということは、こんなにも心を和ませ、リラックスできるものだとは…。自分が日々の生活でいかに些細なことでイラつき悩んでいるか馬鹿らしくなりました。もっと心を大きく持って笑い飛ばせるくらいになりたいです。前向きな大人の態度は子どもにもとても良い影響をあたえるものなのだとつくづく感じました。体育館に集まり、話にくいつく子どもたちの目を目の当たりにし、嬉しく思います。こんなに笑った子どもを見たのも久しぶりですが、自分自身の笑い声も久しぶりに聞きました。参加して良かったです。（南小保護者）

ぼくは牧口さんの話を聞いて「人間はすごい力を秘めているのだ」ということを知りました。松葉づえをバット代わりに使っていたと聞いてちょっと笑いました。ぼくは街中で牧口さんを見かけたら「よお、おっちゃん、南小で話を聞いた少年やで」と言いたいです。（5年男子）

人権教育推進会議情報誌『はじける ころ』

発行 箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会
人権教育課 TEL072-724-6921 FAX072-724-6010
e-mail : edujinken@maple.city.minoh.lg.jp
平成19年（2007年）1月
人権教育推進会議委員

守婦朋子、小関麻沙好、平沢清美、河野秀忠、中嶋嘉伸、安東由紀子、松川知恵、福島全子、上田晃江、上中弘基、藤原清子、細井末子、中田和成、坂田節夫、主原照昌、倉橋利治、川上加津子、仲野公、森田雅彦、奥山勉、上西彰、栗本忠夫、前田健、中野仁司、稲野公一、若狭周二、森井國央、笹川実千代、福永茂、中村信隆、千葉亜紀子、南悦司、向井裕彦、庄司豊、塩山俊明、中澤博、津田善寿、加藤真知子、黒田正記、吉田卓司、辻広志、小谷功、谷口あや子、森和則

「はじけるころ」は教職員・P T A 運営委員に配布しています。公共施設においています。
公開ホームページ：<http://www2.city.minoh.osaka.jp/EDUJINKEN/JINKEN/jinken.html>

『特別支援教育』のとりくみについて

特別支援教育コーディネーターに聞きました

平成18年(2006年)11月27日(月) 16:00 箕面市役所別館6階第1会議室

参加・・・ 萱野小学校 森村 康子教諭
 東小学校 出田 裕子教諭
 中小学校 下野 祐子教諭
 豊城南小学校 大浜 淳子教諭
 市民委員 守婦 朋子さん
 聞き手 小関麻沙好さん
 平沢 清美さん

はじめに

箕面市の障害教育は、障害のある子どもも障害のない子どもも「ともに学び、ともに育つ」ことを基本に、地域の小中学校で学んでいく教育をすすめてきました。

平成19年度から全国的に「特別支援教育」の取り組みが始まりますが、箕面市では、これまで培われてきたこの人権教育、障害教育の理念をもとにし、一人ひとりを大切にされた教育をさらに継承・発展させていく教育ととらえ、平成17年度から準備を進めてきました。

この特別支援教育では、従来からの養護学級に在籍する児童生徒をはじめ、学習面やコミュニケーションの取り方等、学校生活や学習活動をしていく中で困難を感じている子どもたちに対して、一人ひとりのニーズに応じた支援をしていく教育であるととらえています。各担任や担当者など個人の対応だけでなく、各学校の校内体制に合わせて学年や学校内で支援チームを組み、その組織

のまとめ役としての「特別支援教育コーディネーター」を位置づけて学校全体で取り組むようになっています。

今回は、小学校4校の特別支援教育コーディネーターの先生方に集まっていたいただき、役割や思い、取り組みを話していただきました。

Q・・・各校の取り組み(特別支援教育コーディネーターとして)を教えてください。

A・・・通級指導担当で、放課後に教室に通ってくる子どもの指導をしています。また、コーディネーターとして担任の先生と相談・協力したり、チームで支援しています。支援には3段階「①担任の支援②チームティーチング(Ⅱ授業に2名の先生が関わる指導方法)などの支援③個別対応として放課後教室での支援」に整理して対応しています。

子どもたちはクラスの授業の中で「わかった」経験をすることが重要で、その助けとなるように担任の先生に教材、支援カードなどを提案し活用してもらいます。クラスの中で担任の先生が「みんなが分かる授業づくり」ができるように、その手助けをしています。

A・・・生徒指導担当でコーディネーターとして外部機関とのつなぎや校内体制づくりなどの役割を担っています。取り組みの大前提として『①共に学び合う温かい関係づくり②どの子どもにとっても分かりやすい授業づくり』を大切にしており、教職員

A・・・給食前の学習時間に参加している児童の保護者には直接お会いしたり、お手紙を出したりしています。支援が必要だと思つとき、保護者の理解が得られるように、お話をするのは難しいです。その子のことを保護者といっしょに考えるというスタンスを心がけてお話をするようにしています。小学校に入つての早い段階のほうが保護者にもお話を受け入れていただきやすく、支援につながりやすい例が多いです。

Q・・・保護者が支援されることを拒否される場合はないですか？

A・・・子どもたちが(学校生活の中で落ち着いて)良くなった姿を見たらうこと。目に見える形で(保護者に)成果を示すことが大切だと思います。

A・・・(ほとんど)家庭の協力が得られないケースがあったが、学校で支援していく中で、子どもががんばっている姿を保護者に担任が伝えることを積み重ねることで保護者の教育への関心も高まり、家庭の協力が得られるようになりました。

Q・・・この取材でみなさんに一番伝えたいことは何ですか？ 特別支援教育って何かをわかりやすく教えてください。

A・・・ポイントは「具体的手立て」と「信頼づくり」だと思います。新たな人的配置のない中で特別支援教育ですが、どの子どもも楽しく過ごしたいし、勉強が分かるようになりたいと思つていて、先生もそう願っています。「どの子どもにとってもわかりやすい授業、信頼できる学校づくり」ということを大切に取り組みを進めたいと思います。

A・・・先生がその子に合ったサポートをする姿をまわりの子どもたちは見えています。いっしょにいる子どもたちがその子を理解していき、集団そのものが育っていきます。先生はそのようなモデル

みんなで研修を積み重ねています。

月曜日の給食時間には、サポートチーム(コーディネーターや専科の先生など)でランチタイムミーティングをもっており、タイムリーな情報の共有の場となっています。また、学期毎に個別の指導計画をたて、担任と支援者でどの場面でもどんな支援をするのか、具体的な手立てを話し合っています。

A・・・給食準備時間に学習する時間を設けて少人数指導担当やボランティアの方など2〜3名で学習支援をしています。しかし人的に不足していて継続していくのは難しいです。この学習会では学習だけでなく生活面での目標を設けてきたらシールを貼るなど子どもたちに具体的な目標を示して取り組んでいます。

パニックを起こしたときのタイムアウト(教室以外でほっとできる時間)の場を設けたり、担任がその子に声をかけている時間にその他の子どもたちを指導したりするなど複数の先生で子どもたちを見ていくことが大切だと思います。

A・・・人権教育担当教員でチーム支援体制を取っています。チームティーチング教員として授業で関わることもしています。各クラスの情報を集約したり、ケース会議で誰がどのように対応するか具体的な支援方法を考えています。学習の課題やコミュニケーションに課題のある子どもをサポートとしてボランティアが関わったり、スクールソーシャルワーカー(Ⅱカウンセリング、コンサル

(どう接すればいいか)を子どもたちに見せていると思います。

A・・・今までは担任の先生一人に任されていた。しかし特別支援教育は、子どものことをチームで考えることだと思つています。いろいろな面(人)から見ることができつます。最初に支援の具体的目標を立てて、それを支援チーム内で共有することは大事なことです。

A・・・チームでの対応ができることが最大の良い点。支援チームみんなで支援方法を考え、その結果を振り返る。担任の先生だけではなく、他の先生の見方も取り入れることで、多面的な支援方法が考えられ、子どもにとってより有効な関わりができるので安心感が得られるのが一番大きいと思つています。まわりの子どもが理解して関わり方を学ぶことは大事です。大人が率先し、子どもが見習うことができる。下の学年の子どもを6年生が教えてくれている。6年生も優しくなります。

A・・・支援を受けている児童が下の学年との関わりを経験して対人関係を学び、それを同学年の中でも生かしてうまく関わることでできた例もあります。

A・・・子どもの良い姿を見せられる場があることがいい。みんなで温かい場をつくるのが大切だと思います。

Q・・・クラス担任の時とコーディネーターとなった今と、何が違いますか？

A・・・特別支援教育コーディネーターとなつてから、「その子に自分が何ができるか」考えるようになりました。今は担任に戻つたら〇〇しようとか、〇〇してみようとかいろいろ考えます。他の先生方といろいろ考えたことをお互い出し合う中で、自分自身も変わつてきていると思つています。

A・・・子どもに対する基本姿勢は変わりません。し





「多文化共生と在日外国人教育」分科会

がしている様子
がよくわかりま
した。
ただ、もう一
歩進んで、異文
化理解が人権学
習に結びつくこ
ころまで行き着
くには、やはり
継続的な取り組
みが必要なので
はないでしょう
か。後半にお話
しをされた池田
の小学校教諭で



「次世代への継承」分科会

感性、問題意識による
ところが大きいと思
います。だからこそ、「知
らないことを知らない」
と言って、本音で話し
合える雰囲気グルー
プ討議が望まれている
と思いました。
人権教育推進会議市民委員
守 朋 子

●

在日外国人とひとくりに言われますが、他市
に比べ箕面は実に多くの国籍を持つ外国人が住む
町ではないでしょうか。各校の取り組み報告を聞
いていて、異文化理解の学習などにしても、その
特色を積極的に活かし、地域在住の外国人の方の
協力を得て、より実感のある体験を、子どもたち

かし新たに増えてくるものがあります。だから、
たくさんの方がコーディネーターの立場を経験
することは大切だと思います。
A・・・学校の風通しが良くなったと思います。お互
いの先生方が助け合うという意識ができています。

【市民委員さんの感想から】
キーワードは、「チームワーク」
先生方のチームワーク、話し方のモデルを示し
ながらの保護者とのチームワーク、上級生を巻
き込んでのチームワーク、学校全体としてのチ
ームワーク。コーディネーターの方が、そうい
うチームワークの要になっておられることをイ
メージできました。

【座談会を終えて】
特別支援教育は、「みんなが分かる授業づくり」
の中で、子どもの見方について教職員が「その子
に何ができるか」を考えること。そして教職員の
関わる姿を見て、まわりの子どもたちが固定的な
見方を変え、まわりの子どもが理解して関わり方
を学び、お互いが育っていく教育だとみなさんの
話を聞いて思いました。（事務局）

箕面市人権教育研究会・箕面市外国人教育研究会・箕面市教育研究会 8月1日夏季合同一日研修会開催

8月1日（火）に市民会館会議室などを会場として、箕面市内の先生など約400名が参加して
おこなわれました。人権教育推進会議は人権・部落問題学習分科会と共催して、日本で最初に人権
を宣言した人々の姿に共感することをテーマに『水平社創立に思いを馳せて』として奈良県にある
水平社博物館館長 守安敏司さんを講師に分科会を開きました。

●夏季合同一日研に参加しての感想●

「水平社創立の思想——水平社博物館
の展示からみえるもの——」

人権・部落問題学習分科会
水平社博物館の展示をみるような臨場感あふ
れるお話をした。海外報道でも注目された「全国水平
社創立宣言」が読み上げられたのは京都でしたが、
水平社が創立されたのは奈良県御所市柏原。創立
にいたる背景には、それ以前にも闘いの歴史があ
ったこと、桐や膠産業という経済的基盤があった
ことだったそうです。後の時代になって創立者た

ちが、神格化される危険性や当時の組織間の対立
などにも触れられ、史実に基づき多様な切り口で
理解することの大切さを学ぶことができました。

「ハートの引継ぎは
教職員集団によつて！」

次世代への継承分科会
昔のような合宿や飲み会はなくとも、このよう
なグループ討議があれば、ハートの引継ぎは可能
だと思いました。グループ討議では、教員歴10年

ある皇甫康子さんの話をうかがって、よりその思
いを強くしました。単発的な取り組みでなく、常
に在日外国人としての目を持つ方が身近にいると
いう強み、折に触れさまざまな形で、学校内に韓
国朝鮮を感じる事ができる環境と言うのは、在
日韓国人の保護者としては、うらやましい限りで
した。

しかし現状では、それは数少ない特別なケース
で、実際には当事者がいなくても、異文化をパス
クポーンに持つ人たちの存在を認識し、受け入れ
られるような体験を、少しでも多く、継続的に出
来る環境を作っていくかなくてはならないと思いま
した。現場の先生方は試行錯誤を繰り返して、大変
な事だろうと察せられます。だからこそ、夏季合
同研修のように先生方の横のつながりを強められ
る場で、有意義な交流が続くことを願っています。
人権教育推進会議市民委員 上田 晃江

●箕面研夏季合同一日研に参加して

午前の部は「水平社創立に思いを馳せて」、午
後の部は「ハートの引継ぎは教職員集団によつ
て！」に参加しました。

水平社創立からの歴史を学ぶ良い機会でした。
昨今、同和利権などといわれ、同和教育・人権教
育が悪用されているような記事を目にすることも
あり心配しておりますが、歴史からきちんと学
べる場所があると再確認できたことは、私自身に
とっても意義深い学習会でした。

午後の部では、かつて同推校だった学校で人権
教育を実践されてきた先生、今実践されている先
生の学校教育への思いが話され、会場の全員でパ
ネラーの先生方の話を共有できる機会だったと思
います。



人権・部落問題学習分科会

以下の先生方3人と20年以上の先生1人のグルー
プに参加しました。教員歴の長い先生に、「何を
引き継ぎたいと思っておられますか？」と聞いた
ら、「人権感覚」という言葉が即座に返ってきま
した。人権感覚を磨くというのは、一人ひとりの

ある先生が「教育問題が解決されないと部落問
題は解決しない」と言われた一言に集約されてい
るであろう様々な問題の重さを感じました。また、
ある校長先生が「今は個人情報のことから家庭訪
問も戻込みしてしまう先生もおられるが、そんな
ことよりもその子を何とかしたいという大きな情
熱を持って出向きなさい。自信を持って物事にぶ
つかりなさいと指導している。」と話されました。
「次世代へ人権教育のハートをどう継承するか。
幅広い年齢層の教職員が語り合うことでつながり
ます。」テーマどおりの収穫ある学習会だった
し、またこの機会の発展形としての「未来塾」の
ようなものが、箕面市独自で開催されたいいの
になあと強く思いました。

3年連続して夏季研に参加しましたが、今年の
会場は、参加者が発表者と近い距離で一体感の持
てる雰囲気の中で進められ、一番参加した実感の
持てる研修会だったです。身も心も熱くなった一
日でした。
人権教育推進会議市民委員 小関 麻沙好

この研修会は、毎年人権教育について分
科会テーマごとに別れて開催されていま
す。今年度は午前中4分科会、午後3分科
会がありました。感想を紹介した分科会の
他にも、「家庭との連携」・「学力保障と授
業づくり」・「子どもの育ち」・「共生の教育」
という分科会がありました。夏休み期間中
に、多くの先生がが真剣に人権教育につ
いて学ぶ場として位置付いています。

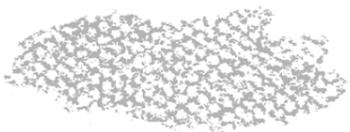
（事務局）

天国に行ったかな、ブチ



かわのひでただ

ボクの家には、一匹のイヌがいた。名前は、「ブチ」っていうんだ。ネ「に」「三毛ネ」
 っているだろう。ブチは、茶色、黒、白のブチになった三毛イヌ。だから名前がブチ。
 ブチは、ボクが生れたころに、知り合いのひとからお父さんがもらってきたんだ。ボク
 は知らなかったけど、ちいさな子イヌで、お母さんは、
 「無事に育つかしら。」
 と、心配したそつです。でも、そんな心配なんか知らん顔で、ブチは、どんどん大きくな
 った。ボクも車イスで、どんどん大きくなった。



いろいろゴタゴタがあったけど、ボクは、小学校、中学校を卒業して、今年、桜の花の
 なかで、高校生になった。ブチも一五才になった。ボクは、高校生なんだから、通学や学
 校のなかで、ヘルパーさんを使って、生活を工夫してる。モチ、サボりも、寄り道もあり
 でね。でも、ブチは全然進歩しないな。食いしんぼだし、「お手」も「おすわり」も「チ
 ンチン」もできない。お父さんや、ボクの顔を見ると、「ワンワンほえて」
 「散歩につれて行ってくれえ。」

と、おねだりするばっか。なんの取り柄もありません。まあ、知らないひとが通る
 と、お母さんがイヤな顔をするへらへらして、「うるさくほえるから、ドロボーよけにはなるか
 な。」

ある日、秋の暗い空色の夜、ボクが寄り道をして、ヘルパーさんとおそく帰って来ると、
 いつもは、クサリがちぎれるばかりに、ワンワン甘えた声を出すのに、ブチがイヌ小屋の
 なかで、小さくシッポをふって、大きな目をむけただけ。次の朝、お母さんが眠っている
 ボクをゆりおこして、

「リョウ、リョウ、起きなさい。ブチが、ブチが……死んじゃってるよ。」

と。お母さんは、完全に涙目になっている。オロオロしてる。ボクは、お父さんに押し
 もらって、ブチの小屋までスッ飛んで行った。ブチは、お母さんのあげたエサを前にして、
 大きな目を見開いたまま、息を吐いていなかった。

お父さんが、

「ブチも年だからなあ。人間の年だったら、百才を越えているくらいだ。」

と、力なくつぶやいた。ボクは、なんだか涙ばかりこぼれた。お父さんは、

「清掃工場にペレットを焼いてくれるところがあるけれど、ブチがゴミのように焼かれる
 のはイヤだから、知り合いが持っている山に埋めよう。生き物は、全部土に帰るんだから。」
 と、いった。ボクは、黙ってつなずくばかり。ボクもお父さんも、学校と会社を休んで、
 お母さんも一緒に、山へブチを埋めに行った。

その日から、家にブチはいない。ワンワンほえる声もない。イヌ小屋は、からっぽ。と
 ても淋しい。ブチは、なにもできない、ただの食いしんぼイヌだったけど、とつてもボク
 に甘えてくれた。人間は、ボクを特別な目で見られるけれど、ブチは、ボクをそんな目で見
 ないし、差別しなかった。愛してくれただ。もっと……もっと、かわいがればよかった。
 天国でも食いしんぼやってるんかなあ。

あつ、また、涙が出る。

秋の夕暮れに……

みんなではなじあうワン

- リョウ君が学校行くと、どうしてゴタゴタがおきるのでしょうか。
- 生き物は、死ぬとどうして土に帰るんかな。
- あなたは、なにか動物を飼ったことがありますか。
- イヌの年と、人間の年は、どのようにちがうのでしょうか。
- ブチは、リョウ君を差別しなかったというの、どういう意味なのかな。
- リョウ君を見る、「特別な目」って、どういう目なんでしょうか、先生といっしょに考えま
 しょう。

